



がん患者さんの治療と生活をつなぐ
NPO法人 キャンサーリボンズ

NPO法人 キャンサーリボンズ

第4回「がん支えあいの日」 記念フォーラム
がんと「暮らす」「働く」

第1部

第2部

報告書



2012年7月

NPO法人 キャンサーリボンズ

<実施概要>

■テーマ	がん と「暮らす」「働く」
■開催日	2012年6月16日(土) 第1部 11:15~12:00 (開場 10:45) 第2部 13:15~16:20 (開場 12:45)
■会場	ニッショーホール 2F ホール (東京都港区虎ノ門2-9-16)
■参加者数	午前の部 430名 午後の部 630名 延べ人数 1060名

【主催】	特定非営利活動法人キャンサーリボنز
【共催】	バイエル薬品株式会社 がん性疼痛緩和推進コンソーシアム (塩野義製薬(株)、帝國製薬(株)、テルモ(株)、日本新薬(株)、久光製薬(株)、ムンディファーマ(株)、 ヤンセンファーマ(株))
【協賛】	アストラゼネカ株式会社 アフラック(アメリカンファミリー生命保険会社) サンスター株式会社 株式会社スヴェンソン 株式会社パソナ ロート製薬株式会社
【後援】	厚生労働省、日本医師会、日本栄養士会、日本看護協会、日本薬剤師会、日本癌学会、 日本がん看護学会、日本癌治療学会、日本緩和医療学会、日本臨床腫瘍学会、 日本対がん協会、労働者健康福祉機構、がん患者団体支援機構

■プログラム

<第 1 部 : がん支えあいセミナー>

(敬称略)

11:15~12:00

講演 がん哲学外来

<講師> 樋野 興夫 (順天堂大学医学部病理・腫瘍学教授、NPO 法人がん哲学外来理事長)

<第 2 部 : がん支えあいトーク>

(敬称略)

13:15~16:20

開会宣言

福田 護

(キャンサーリボンズ理事長、聖マリアンナ医科大学プレスト&イメージングセンター院長)

13:20~13:35

講演 1 今後のがん医療が目指すべきもの—地域で支えあう力とは—

<講師> 江口 研二 (帝京大学腫瘍内科教授、キャンサーリボンズ委員)

13:35~14:00

講演 2 「暮らす」「働く」を支える、がん治療の今

①大腸がんの治療を例に

<講師> 吉野 孝之

((独) 国立がん研究センター東病院消化管腫瘍科消化管内科医長、キャンサーリボンズ委員)

14:00~14:10

展示ブースの紹介

「自分らしい生活を支える知恵と工夫」を集めたブースの内容、見どころを紹介

14:25~14:50

講演 2 「暮らす」「働く」を支える、がん治療の今

②乳がんの治療を例に

<講師> 中村 清吾

(昭和大学医学部乳腺外科教授、昭和大学病院プレストセンター長、キャンサーリボンズ理事)

14:55~16:30

パネルディスカッション がん「暮らす」「働く」のための、準備は整いましたか?

<パネリスト>

浅野 史郎

(慶應義塾大学総合政策学部教授、元厚生労働省(23年勤務)、前宮城県知事、白血病(ATL)の治療中)

荒木 葉子

(荒木労働衛生コンサルタント事務所所長、産業医、キャンサーリボンズ理事、『「がんと働く」リワークノート』編集委員)

中村 清吾

(昭和大学医学部乳腺外科教授、昭和大学病院プレストセンター長、キャンサーリボンズ理事、『「がんと働く」リワークノート』編集委員)

鎗野 りか

((公財) 田附興風会北野病院副看護部長、がん診療連携相談センター副センター長)

石田 正則

(株式会社/パソナ取締役常務執行役員・営業総本部)

<コーディネーター>

岡山 慶子

(キャンサーリボンズ副理事長、産業カウンセラー、朝日エルグループ会長、『「がんと働く」リワークノート』編集委員)

がん支えあいシンボルソング合唱

<演奏>

亀山 光昭、小林 契、星野 文雄

■第 1 部：がん支えあいセミナー

司会 岡山 慶子 (がんセンターリボンズ副理事長、産業カウンセラー、朝日エルグループ会長、『がんと働く』リワークノート編集委員)



男性の 2 人に 1 人、女性の 2.5 人に 1 人が、がんに罹患するという時代になり日本人のがんへの罹患は増え続けています。NPO 法人がんセンターリボンズは、がん患者さんの『治療』と『生活』をつなぐ』をテーマにつくられました。がんセンターリボンズの活動の一つである、患者と家族が支えあえる情報交換の場として作りました「リボンズハウス」は、全国に広がりを見せています。社会全体でがん患者さんを支えていくこのような活動が増え、がんと共に暮らしやすい社会化が進むことを願っています。

【講演】がん哲学外来

樋野 興夫 (順天堂大学医学部病理・腫瘍学教授、NPO 法人がん哲学外来理事長)



「がん細胞に起こることは、人間社会に起こる」、これが「がん哲学」です。がんは、1 個の正常な細胞が、ある日 1 個のがん化した細胞になることから始まります。1cm、1g の組織の中に 10 億個のがん細胞があつて、ようやく初期がんになります。1 個から 10 億個へ成長するには何年もかかるのです。何故あなたががんになったかは、誰にもわかりません。生きるということは、がん化への道なのです。がんの原因にはタバコや食事、感染症などがありますが、それは引き金に過ぎず、遺伝子に含まれているのです。

がんは、いわば家に不良息子ができたようなものです。がん細胞は使命を見失って暴走している状態であり、治すには使命を自覚した細胞にしなければなりません。おそらく、不良息子が更生する手段と、がんを治す手段には類似性があるのです。

我々は人の体に巣食ったがん細胞に介入し、その人の寿命を再び未確定にし、死を忘却させることが仕事です。目の前に来た患者さんに、がんにかかっても、死なないと思わせるのが治療なのです。がんと共存し、他の病気で天寿を全うする、それが理想です。

■第 2 部：がん支えあいトーク

挨拶 福田 護 (がんセンターリボンズ理事長、聖マリアンナ医科大学プレスト&イメージングセンター院長)



がんはすべての人にとって他人事ではありません。これが、私たちがんセンターリボンズのコネプトです。私が 40 年前に医師になった時は、医師が医療の頂点におり、がんケアも医師を中心として行っていました。現在は、状況が変化し、がん治療は患者さん中心のものとなりました。医療側は、それぞれの専門家がチームを組むという形態に変化しました。これは、理想的ではありますが、日常の中に専門家のチームを持ち込むには限界があります。がん患者さんが少しでも快適な生活を送るために、社会全体でがん患者さんを支える仕組みへと変えていきたいと考えております。

【講演 1】 今後のがん医療が目指すべきもの—地域で支えあう力とは—

江口 研二 (帝京大学腫瘍内科教授、がんサバイバル委員会)



2006年に成立したがん対策基本法では、がん患者さん・患者さんのご家族の負担を軽減することが定められ、疼痛等の痛みを軽減するための初期からの緩和ケアや、自宅での治療などが推奨されるようになりました。ある調査では、がん患者さんの8割が自宅療養を希望しています。しかし、自宅で療養するためには、家族の介護や緊急時に対応が出来る医療者や施設などが必須となるため、がん患者さん側と医療側の双方が、自宅療養は難しいと考えています。

そこで求められるのが、地域緩和ケア支援のネットワークの整備です。緩和ケア普及のために厚生労働省のプロジェクトとして、モデル地域で5年間、緩和ケアのパンフレット配布や緩和ケア専門の看護師の派遣などを行いました。地域連携の緩和ケアのプロジェクトとして、多職種のスタッフを集めての教育研修や関係担当者の定例会議など、がん患者さんを地域全体で支えていくためには、顔の見える関係であることが重要です。いつでもどこでも、質の高い緩和ケアを適切に受けられるようにするために、地域内での連携・役割分担、そしてそれらの適切な運用が必要なのです。

【講演 2】 「暮らす」「働く」を支える、がん治療の今

①大腸がんの治療を例に

吉野 孝之 (独)国立がん研究センター東病院消化管腫瘍科消化管内科医長、がんサバイバル委員会)



大腸がんは「根治切除できるか、できないか」によって治療の目的が変わります。根治切除が可能な場合は手術をし、根治目的での補助化学療法を行い、根治切除が不能な場合は延命目的の全身化学療法となります。大腸がんが再発した場合は、70%もの方が切除不能となってしまうため、手術後の補助化学療法は再発を抑える目的で行われます。手術が行えなくなると、残された手立てが延命治療のみとなってしまうのです。

抗がん剤には様々な種類があります。近年増えている分子標的治療薬は従来の抗がん剤とは異なり、研究に基づいた標的(分子)の設定により、がん細胞だけを攻撃するようになっています。従来のものに比べると、副作用が軽くて済む場合もあります。しかし、分子標的治療薬は、特定の遺伝子に異常があると効かないものも存在し、投与する前に遺伝子検査が必要となります。また、これからも新しい薬が登場を待っている発展途上の分野でもあります。

最高の医療とは、医療者と患者さんの強い絆があってこそ実現します。また、分子標的治療薬にも副作用はあり、患者さん自身の適切なセルフケアと医療者側の理解を深めていくことが必要となるでしょう。

②乳がんの治療を例に

中村 清吾 (昭和大医学部乳腺外科教授、昭和大病院プレストセンター長、キャンサーリボンズ理事)



日本における乳がんの患者さんの数は、1985年から2007年で約3倍に増加しました。また、年齢別の乳がん罹患率では、30代が飛躍的な増加を見せています。がんになるかどうかの最も高い要因として「乳がんの既往」があります。一度乳がんを発症したことのある方は、反対側の乳房に乳がんを発症するリスクが、発症したことのない方の6倍になります。そこで、治療後にも長期間に渡って定期的な検査を受けていただくことを勧めています。再発は、年5年以内に起こることが多く、術後2~3年ほどがピークといわれ、経過とともに頻度は下がりますが、

20年後に発症する方もおられます。乳がんの患者さんは、長期の経過観察が必要となります。

がん治療後の長期生存者は、がんと共に生きていかななくてはなりません。現在、がん患者さんのQOL(生活の質)を支えるために、さまざまな取り組みが行われています。先の見えない不安に寄り添い、払拭するために、必要なことは前向きな姿勢だと考えています。

■パネルディスカッション がんと「暮らす」「働く」ための、準備は整いましたか

(敬称略)

＜パネリスト＞	浅野 史郎	(慶應義塾大学総合政策学部教授、元厚生労働省(23年勤務)、前宮城県知事、白血病(ATL)の治療中)
	荒木 葉子	(荒木労働衛生コンサルタント事務所所長、産業医、キャンサーリボンズ理事、『「がんと働く」リワークノート』編集委員)
	中村 清吾	(昭和大医学部乳腺外科教授、昭和大病院プレストセンター長、キャンサーリボンズ理事、『「がんと働く」リワークノート』編集委員)
	鎗野 りか	((公財)田附興風会北野病院副看護部長、がん診療連携相談センター副センター長)
	石田 正則	(株式会社パソナ取締役常務執行役員・営業総本部)
＜コーディネーター＞	岡山 慶子	(キャンサーリボンズ副理事長、産業カウンセラー、朝日エルグループ会長、『「がんと働く」リワークノート』編集委員)

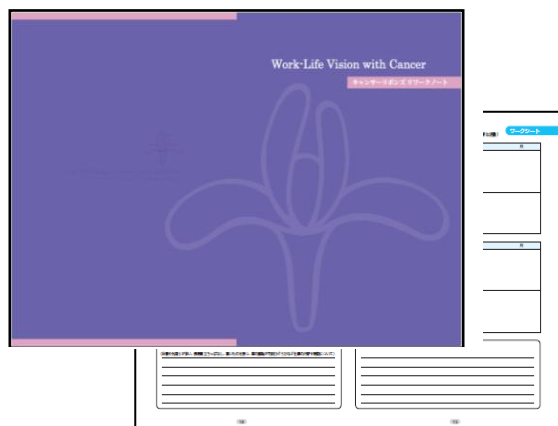


まず、NPO法人キャンサーリボンズ副理事長 岡山慶子さんより、パネルディスカッションの趣旨説明がありました。「がん患者さんにとって、『働く』ということは、生活の維持と共に社会との接点や自分らしい生き方など、自己実現の意味も大きく、社会全体で支えていくべき課題です。私どもの調査によると、医療現場では『働く』ことが、職場では『がん』のことが語られておらずがん患者さんは情報の入手方法や相談先を欲しているという結果でした。このパネルディスカッションが、これらをつなぐ第一歩になれば幸いです。」



浅野史郎さんは「ATL」という白血病の一種を、61歳で発症された経験から、患者さんの心構えを話されました。「告知をされた瞬間は目の前が真っ暗になりましたが、1時間後に『この病気と闘う。必ず勝つ』と口にした瞬間に恐怖がなくなりました。おかげで、不安がなく治療を受けられました。それは、信頼できる医師にかかっていたことと、患者として、積極的に医療者側に対して適切なコミュニケーションを図っていたことが大きいと思います。最大限努力をしつつも、今も病気という運命と共に生きています。」

荒木葉子さんは、『「がんと働く」リワークノート』の編集に産業医として関わった立場から、リワークノートの意図や活用法を説明しました。



↑『「がんと働く」リワークノート』

近年、医学の進歩によって、治療中や治療後のがん患者さんが職場に復帰することが増えてきました。産業医として、がんと就労の問題に取り組まなくてはいけないと感じていたときに、『「がんと働く」リワークノート』という、新しいツールの開発に関わりました。リワークノートは、自分自身の心の整理やこれからを考える際に大きく役立つと思います。」



鎗野りかさんは、がん診療連携相談センター副センター長として、『「がんと働く」リワークノート』を実際に活用している立場からお話されました。「今まで、『働く』ということに関して、看護師側から患者さんに働きかけることはあまりありませんでした。看護師は知識はあっても、大病院であればあるほど大半が若いため、『働く』という問題について患者さんをサポートするには経験が足りません。しかし、若い看護師もベテランの後ろ盾があれば、患者さんと一緒に問題に取り組み、これからの治療や生活を構築していく作業を進めていくこともできます。そのような場面で、客観的なこのようなツール（『「がんと働く」リワークノート』）をもっともっと活用していきたいと思います。」



石田正則さんは、企業の中で、がん患者さんやその家族の方の話し合いの場を提供する取り組みをいらっしゃいます。「近年、社内のがんになる方が増え、会社としてがんに取り組むことになり、座談会を企画しました。そこでは様々な情報の交換が行われ、『話ができて良かった』『続けてほしい』という声が寄せられています。一方では、「人材派遣会社に『がんになった』と報告すると仕事を紹介してもらえないのではないか」という質問もありました。我々の会社も含めて、がん患者さんの受け入れ体制としてはまだまだ整っていないと言わざるをえません。しかし、ここ最近では、比較的負担が軽い部署に配置転換するなど配慮をして、是非復帰してほしいと願う企業も増えています。得意・不得意なことと同じように、がんになったことも教えていただきたいと思っています。もっと皆様が語り合えるような場をつくり、広げていきたいと考えています。」

■展示ブースの紹介

ステージでは「自分らしい生活を支える知恵と工夫」を集めた、企業や団体の展示ブースの内容・みどころを紹介、ブースには多くの参加者の方が立ち寄られました。

〔痛みケア：がん性疼痛緩和推進コンソーシアム〕



〔スキンケア：ロート製薬株式会社〕



〔口腔ケア：サンスター株式会社〕



〔脱毛ケア：株式会社スヴェンソン〕



〔がん体験者からのメッセージ：アフラック〕



〔リボンズハウスコーナー〕



※このほかロート製薬株式会社から、肌の保湿のためのスキンケア製品がご参加の皆様へ配られました。